

# 東日本大震災と文学

神谷 忠孝

## はじめに

2011年3月11日に起こった東日本震災は世界中を震撼させた。呆然とした状態から気を取り直し、文学者たちが言語による死者、被災者へのメッセージを発信し続けて今日にいたっている。その中から文学関係者の言語表現に注目し、何を伝えようとしているかを検証してみる。いち早く反応したのは短詩形にかかわっている人たちだった。次にドキュメントが続き、小説、エッセー、評論があらわれた。

## 1. 短歌

長谷川権（2011）は俳人として有名であるが、『震災歌集』を刊行し印税を義捐金として寄附することを思いついた。

津波とは波かとはばかり思ひしがさにあらず横ざまにたけりくるふ瀑布  
夢ならず大き津波の襲ひきて泣き叫ぶもの波のまにまに  
かりそめに死者二万人などといふなかれ親あり子ありはらからあるを  
原発を制御不能の東電の右往左往の醜態あはれ  
つつましきみちのくの人哀しけれ苦しきときもみづからを責む

叙景歌から電力会社、政治家への怒り、救助隊への感謝など多岐にわたる。俳句よりも即興性に効果的な短歌が多く作られている。札幌在住の山本司は短歌雑誌「炎（ほむら）」に「ずれたる地軸」を連載している。最近号（2013年8月）から五首を選んだ。

いちはやく自然エネルギーの発電所を造りてあれば・・・怒りこみあぐ  
リズムなす雪解け水のしたたりに春を想えり被災地を思えり  
忘れえぬ間に災いの因をなす大飯原発再開されんと  
桜草群れなし咲けり被災地の運動会の児童のひとみ  
〈よだかの星〉とはなれぬ原発ぞ造りし人の罪は不問に

内田弘（2013）の『霧こもる街』から五首を選んだ。

限りなく放射能含み瓦礫に降るフクシマは雪 札幌は吹雪  
原発が核攻撃の標的に変はるは誰でも知つてゐるではないか  
原発の廃棄物がやがて地下道に置かれることもあるやも知れぬ  
深海に命の起源を見て来しか烏賊よセシウムを体に溜めるた

かの牛はあの犬は土に死にたるかフクシマの見えぬ放射能のなか

## 2. 詩

震災直後から「震災詩」が多く量産されて今日に至っている。政府、学者、東電を攻撃する内容である。こういう風潮の中で毅然として自己の内面を凝視した詩を作ったのは辺見庸である。詩集『眼の海』（2011）から一篇。

死者にことばをあてがえ  
わたしの死者ひとりびとりの肺に  
ことなる それだけの歌をあてがえ  
死者の唇ひとつひとつに  
他とことなる それだけしかないことばを吸わせよ  
類化しない 続べない かれやかのじょだけのことばを  
百年かけて  
海とその影から掬え  
砂いっぱい死者にどうかことばをあてがえ  
水いっぱい死者はそれまでどうか眠りにおちるな  
石いっぱい死者はそれまでどうか語れ  
夜ふけの浜辺にあおむいて  
わたしの死者よ  
どうかひとりであたえ  
浜菊はまだ咲くな  
畦唐菜はまだ悼むな  
わたしの死者ひとりびとりの肺に  
ことなる それだけのふさわしいことばが  
あてがわれるまで

鎮魂の詩としてすぐれている。「ひとりびとり」が効果的である。為政者や電力会社を批判する前に死者に言葉をあてがって無念の思いに寄り沿おうとしている。詩集刊行後のインタビュー「言葉としての力を生み出す」（『週刊読書人』2012・1・13）で辺見庸は、〈言語はどのみち、しばしば飼いならされます。資本や左右の権力、宗教が最も利用し、それらに利用されやすいものとして危険だと言っているのです。（中略）詩が何らの挑戦性も帯びないなら、それは発砲スチロールの屑みたいなものだというイメージを私は持っています。それがすべてではないですが、詩はもっと現状否定性を帯びてもよいのではないのでしょうか。現状否定的にならざるをえない客観的理由がはっきりとあるのですから。詩は現状の言語秩序に刃向かう純粋な犯罪であってもいいという意識も私にはありません。詩は「社会に意義のある言葉」であってはならないと思います。見慣れたものや正常とされるもの正気とされるものを根底から疑り、何気ない日常に奇異の念を抱かしめる言葉も詩の力であるべきです。〉と述べている。辺見庸は『瓦礫の中から言葉を』（2012）で中原中也、金子みすず、原民喜、

石原吉郎を再評価した。『死と滅亡のパンセ』(2012)の「あとがき」で、「わたしはそれとなく待っていたのだ。いまもそれとなく待っているのかもしれない。世界のすべての、ほんとうの終わりを。目路のかぎり渺々(びょうびょう)とした無のはてに立ってはじめて、新しい言葉—希望はほの見えてくるだろう。」と書いている。

福島市に住む国語教師和合亮一(2012)は『ふたたびの春に』を刊行した。その中から一篇。

#### 避難

一緒に 避難をしましょうと  
電話があった ずいぶんと  
悩んだけれど 難しいと断った  
切った後で 行かなくていいのか 悩んだ  
また違う友だちから 電話が来た  
もう部屋をいくつも借りたから  
行こうよ と強く誘われる  
西のほうへ さあ 早く  
電話を切った 悩ましい  
こんな時 また 携帯が鳴る  
避難すべきなのか  
余震だけが 平然と激しい  
遠い街から 電話が来た  
こちらは 何もなかったような街の様子だと 報告を受ける  
いつでもおいで 待っているから  
電話を切る 日本から日本へ 三月十五日福島市にて

避難すべきか留まるべきかに悩んだ末、留まることを選択した被災者の気持ちを代弁している詩である。

### 3. 俳句

角川春樹(2011)は主宰する俳誌『河』に「あちらの時間」という題で七首を載せた。

天の川いまだ浄土の道しらず  
ほとけにも神にもなれず天の川  
忘却といふ水流れある野分かな  
曼珠沙華記憶の沖に母がある  
コスモスやただ一輛の無蓋貨車  
撫子(なでしこ)の群れ咲く沖に声もなし  
この星も亡びつつあり天の川

死者への鎮魂が中心だが、「この星も亡びつつあり天の川」には地球の未来に対する不安が内包さ

れていて文明批評的である。芭蕉の「荒海や佐渡に横たう天の川」には悠久な自然への憧憬があったが、科学技術への過信から人類の滅亡を想定しなければならない現代人の不幸を句にこめている。

長谷川權（2012）は『震災句集』を刊行。中から五首。

大津波死ぬも生くるも朧（おぼろ）かな  
いつせいに蕨萌ゆるや大自然  
滅びゆく国のまほらに初蕨 「まほら」は「まほろば」「良き場所」  
春行くや翁の道もずたずたに 「おくのほそ道」  
初盆や帰る家なき魂（たま）幾万

これらの句にも芭蕉への思いがあり、「滅び」という表現がせつない。

#### 4. 川柳

南三陸「震災川柳」を出版する会の『震災川柳』（JDC 出版、2013・9）は南三陸町旭ヶ丘地区・歌津地区の避難所の人たちから募った川柳の記録である。2012年2月に自費出版したものに2年後の新作を加えて出版された。小中校生からお年寄りまでの句を三百余首を収めている。ことばによる気力の回復の実践として興味深い。

#### 5. ドキュメント・創作

黒川創の『いつか、この世界で起こっていたこと』（2011）は関東大震災、チェルノブイリ、サハリンでの開発に伴う自然破壊など題材にしている。「神風」では原発1, 3号機が爆発したときの風向きに注目し住民が放射能を浴びずに避難できたことを「神風」で解釈してみせる。世界的視野からの災害と人間の問題を扱っている。

荻野アンナ（2011）とゲリラ隊の『大震災 欲と仁義』は4月から5月にかけて3回にわたって知人二人と気仙沼高校の避難所を訪れたボランティア体験の記録。救援物資の配分をめぐるいざこざやリーダーのあり方を問いかけている。全体にどたばた調で明るい書き方は荻野アンナが好きな坂口安吾の手法を用いているからだろう。

古川日出男（2011）の『馬たちよ、それでも光は無垢で』は、福島県郡山市生まれの作者が震災後友人と車で被災地を巡り、相馬で流鏝馬用の馬が野原をさまよっているのを目撃する話である。家畜やペットの命に思いをはせている。

村上春樹の「非現実的な夢想家として」（「カタルーニャ国際賞」受賞記念講演、「東京新聞」2011・8・9）に次のような箇所がある。

我々日本人は核に対する「ノー」を叫び続けるべきであった。それが僕の意見です。

我々は技術力を結集し、持てる叡智を結集し、社会資本を注ぎ込み、原子力発電に代わる有効なエネルギー開発を、国家レベルで追及すべきだったのです。たとえ世界中が「原子力ほど効率の良いエネルギーはない。それを使わない日本人は馬鹿だ」とあざ笑ったとしても、我々は原爆体験によって植え付けられた、核に対するアレルギーを、妥協することなく持ち続けるべ

きだった。核を使わないエネルギーの開発を、日本の戦後の歩みの、中心命題に据えるべきだったのです。

この講演内容に対して黒古一夫は(2013)、『文学者の「核・フクシマ論」』で猛烈に反論している。戦後の反核運動を無視しているとして原爆文学の軌跡を実証的に論じている。黒古一夫の村上春樹批判は正しいが、あえて村上春樹を擁護すれば、日本の反核運動は国内では盛んだが世界に届いていないと言いたかったのだと思う。外国語に翻訳して世界に発信する仕事を怠っていた日本のジャーナリズム批判と解釈できる。

川上弘美(2011)の『神様 2011』は、1993年に発表した『神様』(中公文庫)という熊と散歩する話の続編である。再び熊と放射能の危険がる野原を人間と熊が対話しながら散歩する。「あとがき」で作者は、「原子力利用にともなう危険を警告する、という大上段にかまえた姿勢で書いたのでは、まったくありません。それよりもむしろ、日常は続いてゆく、けれどもその日常は何かのことで大きく変化してしまう可能性をもつものだ、という大きな驚きの気持ちをこめて書きました。静かな怒りが、あの原発事故以来、去りません。むしろこの怒りは、最終的には自分自身に向かってくる怒りです。今の日本をつくってきたのは、ほかならぬ自分でもあるのですから。この怒りをいただいたまま、それでもわたしたちはそれぞれの日常をたんと生きてゆかし、意地でも『もうやになった』と、この生を放り出すことをしたくないのです。だって、生きることは、それ自体が、大いなるよろこびであるはずなのですから。」と書いている。

石井光太(2011)の『遺体—震災、津波の果てに—』は『週刊ポスト』、『新潮45』に掲載した記事に大幅に加筆修正し書き下ろしを加えて刊行。遺体埋葬にかかわった民生委員、医師、歯科医、消防団員、釜石市職員、海上自衛隊、海上保安部、住職たちからの聞き取りをもとに構成されている。遺体安置所に並べられた遺体に話かける千葉住職のくだり。

母親は死んだ赤ん坊の前にしゃがみ込み、その冷たくなった頬をなでながら、「ごめんね、ごめんね」と何度も謝っていた。夫も目を赤くしてうなだれていた。関係者は近づけず遠巻きに見守っている。千葉はいたたまれなくなり、そっと夫婦のもとへ歩み寄った。隣にしゃがみ込んで手を合わせ、やさしい声で遺体に向かってこう言う。

「相太君、ママとパパが来てくれてよかったな。ずっと待っていたんだもんな」

母親は赤く腫らした目で千葉を見つめる。夫が支えるように彼女の肩をつかむ。千葉は赤ん坊に向かってつづける。

「ママは相太君のことを必死で守ろうとしたんだよ。自分を犠牲にしても助けたいと思っていたんだけど、どうしてもダメだった・・・相太君はいい子だからわかるよな」

夫婦は真剣な顔で聞いている。千葉はさらに言った。

「相太君は、こんなやさしいママに恵まれてよかったな。短い間だったけど会えて嬉しかったろ、また生まれ変わって会いにくるんだぞ」

母親はそれを聞いた途端、口もとを押さえて泣きはじめた。子供のように声を上げて号泣する。夫も鼻水をすすりながら目をぎゅっと閉じる。

どのくだりを読んでも胸にせまる文章が続く。ドキュメントの手法が功を奏している。石井光太は1977年東京生まれのルポルタージュ作家。医療、戦争、文化等をテーマに海外の貧困問題から国内の災害、事件まで幅広く取材している。著書に『物乞う仏陀』『神の棄てた裸体』『絶対貧困』『レンタルチャイルド』『地を這う祈り』などがある。

森絵都(2012)の『おいで、一緒に行こうー福島原発20キロ圏内のペットレスキュー』は福井県在住の中山ありこという43歳の女性の活動ぶりをドキュメントの手法で書いた本である。結びで、「絶望に向かって希望を拾うー彼女たちはこれからも、自分以外の誰かのために、そこにある命を拾い続けることだろう。」と書いている。2006年、「風に舞いあがるビニールシート」で直木賞を受賞。

村上龍(2012)は『櫻の樹の下には瓦礫が埋まっている』で「絆」という言葉について次のように書いている。

東日本大震災のあと「絆」という言葉が氾濫し、今もその傾向は続いている。絆の語源は、犬や馬を繋ぎ止める「手綱」らしい。離れないようにつなぎ止めておくということから、分かちがたい家族や友人の結びつきを意味するようになった。3・11とそのあとの原発事故は、わたしたちに精神的なダメージを与えた。誰もが、被災地以外の人たちも、原罪意識のようなものを抱くようになった。あまりに被害が大きかったので、日本人全体が何か悪いことをしてきて罰を与えられたかのように感じたのだ。

その原罪意識は、人間だったらごく自然に抱くもので、決して間違っていない。多くのボランティアが被災地で活動したが、「何か支援したい」という思いには、その原罪意識も関係していたのだと思う。そして、被災地、被災者のことを忘れないようにしましょう、彼らのために何かできることがあるはずだという思いが、「絆」という言葉に集約されたのだろう。

だが、わたしは「絆」という言葉の流通と氾濫に違和感を覚える。それは、被災地、被災者を思う気持ちだけでは解決できない問題が山積みしていて、「絆」という美しい言葉が、そのことを隠蔽する危険性があるからだ。気持ちだけでは解決できない問題を数多くあるが、もっとも大きく、もっと象徴的なのは「瓦礫」だろう。東日本大震災による瓦礫は、単なる残骸や廃棄物ではない。津波によって破壊され押し流された「生命と生活の象徴」でもある。

津島佑子(2013)の『ヤマネコ・ドーム』に次のようにある。

津波に吞まれて死んだひとたち。そのほとんどは溺死だったとか。多くのひとが死んでも、一方では、死なずにすんだひとたちもいる。溺死したひとたちはどんなにか苦しかっただろう、と生き残ったほうはその苦しみに逃れられなくなる。でも、実際に溺死したひとたちはあっという間に意識を失い、苦しみを感ずるひまもなかった。そのように老母は考える。ずっと前に、息子にも言った。苦しくはない。こうして生きているほうがよっぽど苦しい。

生きているあいだは、時間の流れから逃れることができない。でも、その流れの外側には、死んだひとたちが静かに揺らぎながらたたずみ、時間に流されていくひとたちをまばたきもせず見つめている。死んだひとの眼に流れはとて急なのに、それでいてなにも動かない。流れの外に立つ死者の数はどんどん増えていく。

死んだ人より生き残った人が苦しい、生き残った人たちを死者たちは見つめているという視点は詩的であるが、被災者に寄り添っているように思う。

池澤夏樹（2013）『双頭の船』は次のような小説である。岩手県の築港に「しまなみ8」というフェリーが停泊していてボランティアたちの宿泊所になっている。そこに荒垣源太郎という老人が船長を訪ねてきて、この船には相当甲板面積があるから五百戸の仮設住宅を造って被災者を受け入れるように提案する。船長は早速実行に移し二千人を受け入れて船名を「さくら丸」と命名する。そこに世界動物連合から十数頭のシベリアオオカミをナホトカから北海道に運び、エゾシカ対策に使うようにとの要請がくる。

荒垣源太郎が船に乗る前、家を失って浜辺を歩いているのをボランティアの若者が避難所まで自動車で送ると申し出たとき、次のように言って断る。

こんなことになったんだからみんな大変だ。だけど俺は人一倍大変なんだ。不満と愚痴を鼻先で突っ返される。足りないものをよこせと言うと生きているだけでもありがたいと思えて、相手は上から見てそういう顔をする。相手ってのは避難所を仕切る連中や行政やたまたま隣に寝た奴や道で会う誰かや、ともかくみんなだ。ありがたいさ、あれで波に吞まれなかったのは、まだ立派に生きているよ。だけど俺はもともとがたくさん不満を抱えて生きてきた。人並みに扱われたことがない。この身体を見下ろして、おまえは我慢しろとばかり言われてきた。おまえに偉そうな顔をされたくないって言う。誰だって不満を抱えている。こんな時はここにいる連中は一人のこらず不満でいっぱい袋みたいなものだ。何かあれば爆発する。最初はよかったん。あんな怖ろしいことから逃げられたんだし、それで興奮していたし、なんか別の力が身体の中から湧いて出たみたいだった。けどそんなものあつという間になくなる。生きているだけでもありがたいって言うが、もとの暮らしからの落差ってこともあるだろう。みんな前は避難所じゃなくて自分の家に住んでいたんだ。それを思い出すうちに辛さが効いてくる。世の中、上から下への差別の階段だよ。すぐ上の奴がすぐ下の奴に不満をぶつける。それが下へ下へとごっとなごっとな落ちてくる。いちばん上にいる奴の顔が見たいもんだ。だから俺は言われたことにはきっちり言い返すことにした。一段上から落とされたものは一段上へ投げ返す。それには体力が要る。だから甘えないんだ。歩くんだ。

この独演は被災者のうち独力で立ち上がろうという気概をもった人間の声を代弁している。池澤夏樹が何度も被災地を訪れて被災者の声を聞いたことの集約であろう。

いとうせいこう（2013）の『想像ラジオ』は、東日本大震災で犠牲になった人男がDJとして番組をオンエアし、それは想像力を有する視聴者だけが受信できるといった設定の小説。作者は、小説で死者に語らせたことを、〈生者の声はジャーナリズムが伝えている。小説は死者の言葉を聞く回路がある。大量に人が亡くなったときに、気持ちを落ち着かせる回路を持っていた〉と語る。「死者にことばをあてがえ」という詩を書いた辺見庸と通ずるものがある。

姜尚中（2013）の『心』は作者が実名で「先生」として登場。書店のサイン会に現れた西山直広という大学二年生と、その青年の親友で白血病に罹って死んだ与次郎、その二人がともに愛する萌子というドイツから日本の大学に編入した学生、彼らが所属する演劇部仲間の倫子、功らが織りなす「生」と「死」を問う物語である。夏目漱石の「こころ」を下敷きにして、自殺した作者の息子への思いを

織り交ぜている。

## 6. 評論

加藤典洋 (2011) の『3・11－死に神に突き飛ばされる』は長崎の被爆者でありながら被爆者の治療に献身的に携わった永井隆のような人々の原子力平和利用を取り上げている。川村湊 (2013) の『震災・原発文学論』は、3・11以後の文学者の作品を取り上げて論評している。荻野アンナと高嶋哲夫を原発推進派に分類しているのはやや強引だが、戦後の原子力を題材とした作品をSFや漫画にも視野を広げて網羅的に紹介している。

## 7. 大江健三郎

大江 (2013) は「晩年様式集」を刊行した。自らを「後期高齢者」と記し半世紀前に障害を持って誕生し、多くの小説で中心的存在であり続けた息子や十数年前に自殺した幼いなじみの映画監督の妹である妻、気丈さと不安定を併せ持つ長女などを登場させている。

代々木公園の反原発集会に出席した作家の分身・長江古義人が群衆に中野重治小説「春さきの風」(『戦旗』1928・8)の最終部分を引用して演説する様子を妹の視点から描写する場面が印象深い。

もはや春かぜであった。

それは連日連夜大東京の空へ砂と煤煙を捲きあげた。

風の音のなかで母親は死んだ赤ん坊のことを考えた。

それはケシ粒のように小さく見えた。母親は最後の行を書いた。

「わたしらは侮辱のなかに生きています。」

それから母親は眠った。

(中略)

《なによりこの母親の言葉が私を打つのは、原発大事故のなお終息しないなかで、大飯原発を再稼働させた政府に、さらに再稼働を広げて行こうとする政府に、私はいま自分らが侮辱されていると感じるからです。

私らは侮辱のなかに生きています。今、まさにその思いを抱いて、私らはここに集まっています。私ら十数万人は、この侮辱のなかに生きてゆくのか？あるいはもっと悪く、このまま次の原発事故によって、侮辱のなかで殺されるのか？

そういうことがあってはならない。そういう体制は打ち破らねばなりません。それは確実に打ち倒しうるし、私らは原発体制の恐怖と侮辱のそとに出て、自由に生きて行けるはずです。そのことを、私は今みなさんを前にして心から信じます。しっかり、やりつづけましょう。》

もうひとつ、長江が「三・一一」以前からノートに書き記していた「詩のごときもの」が八頁にわたって「形見の歌」と題して記述されるなかに、三回もでてくる詩句がある。

私のなかで

母親の言葉が、



はじめて、謎でなくなる。  
小さなものらに、老人は答えたい、  
私は生き直すことができない。しかし  
私らは生き直すことができる。

「私は生き直すことができない。しかし私らは生き直すことができる。」というメッセージを、八十歳を定点とする老作家が伝えようとしている。大江は今七十八歳である。正真正銘の「後期高齢者」であり、世界は「三・一一以後」である。「晩年様式」という言葉で作家は絶望ではなく希望を最後に記す。

「大江健三郎ロング・インタビュー―最新作『晩年様式集』と3・11後のこと」(『新潮』2013・12)で聞き手の尾崎真理子が「もっと長い連載になるのでは、と予想していたのですが、そこで区切られた理由があったのですか」と聞いたのに対し、大江は、「福島第一原発の四基ある原子炉の一基は、メルトダウンした核燃料の状態を確認できないまま、二年半が経過した。ほかの原子炉も毎日、大量の水で冷却することが必要で、その汚染した冷却水は大きいタンクに入れて保存してきたわけですが、いつまでこの状態が続けられるかという問題がある上に、タンクの状態の悪化と汚染水漏れは連日報道されている通りです。こちらが沈静しないうちに、各地で起る別の大事故を私は恐れます。それは社会全体を覆う危機としてずっと続いていく。その危機感の中に宙ぶらりんのまま、老年の人間が自分の死について考える。あわせて自分の小説で未解決だった課題を解いて行くということとをこれまでの仕事の続きとしてやって連載を終わりました。」と語っている。

八十歳を作家生活の終着点と設定し、その2年前に単行本にしたのは原発の危機が深刻になっているにもかかわらず、原発事故以前の景気を回復しようとしている為政者とそれを支える多くの日本人へ警告を伝えなかったからだろう。「小さなものら」とは日本人で、「老人」は作家である。「私は生き直すことができない」とは寿命の尽きることを暗示している。「私らは」未来のある若い世代を象徴している。

## 文献

- 古川日出男, 2011・7, 『馬たちよ、それでも光は無垢で』 新潮社。  
長谷川權, 2011・4, 『震災歌集』 中央公論新社。  
長谷川權, 2012・1, 『震災句集』 中央公論新社。  
辺見 庸, 2011・11, 『眼の海』 毎日新聞社。  
辺見 庸, 2012・1, 『瓦礫の中から言葉を』 NHK 出版新書。  
辺見 庸, 2012・4, 『死と滅亡のパンセ』 毎日新聞社。  
池澤夏樹, 2013・2, 『双頭の船』 新潮社。  
石井光太, 2011・10, 『遺体』 新潮社。  
いとうせいこう, 2013・3, 『想像ラジオ』 河出書房新社。  
角川春樹, 2011・11, 「あちらの時間」 俳誌『河』。  
姜 尚 中, 2013・4, 『心』 集英社。  
加藤典洋, 2011・11, 「3・11 - 死神に突き飛ばされる」 岩波新書。

- 川上弘美, 2011・9, 『神様 2011』 講談社.
- 川村 湊, 2013・3, 『震災・原発文学論』 インパクト出版会.
- 黒川 創, 2011・5, 『いつか、この世界で起こっていたこと』 新潮社.
- 黒古一夫, 2013・3, 『文学者の「核・フクシマ論」』 彩流社.
- 森 絵都, 2012・4, 『おいで、一緒に行こう』 文芸春秋.
- 村上 龍, 2012・6, 『櫻の木の下には瓦礫が埋まっている』 KK ベストセラーズ.
- 大江健三郎, 2013・10, 『晩年様式集』 講談社.
- 荻野アンナ, 2011・6, 『大震災 欲と仁義』 共同通信社.
- 津島佑子, 2013・5, 『ヤマネコドーム』 講談社.
- 内田 弘, 2013・6, 『霧こもる街』 いりの舎.
- 和合亮一, 2012・3, 『ふたたびの春に』 祥伝社.

# Great East Japan Earthquake and the Literature It Produced

KAMIYA Tadataka

**Abstract :** After March 11, 2011, literary persons created various works on the theme of the Great Earthquake. In this thesis, we will examine those works under the categories of tanka, haiku, poetry, novels, documents and criticisms. The authors included are You HENMI, Natsuki IKEZAWA, Kenzaburo ŌE, etc.